

アレン・ネルソンさんの納骨式より

名古屋別院フォーラム人權連続講座

佐野明弘さん述(07.7.7)

頭の中が真っ白になって、息も出来なくなり、やっとなつた息とともに涙があふれて止まらなかつたといいます。その時まで彼は泣いていなかった。涙すら戦争に奪われていたのです。そして、自分の境遇をうらみ、自分の選択を悔やみ、自分自身にも世の中にも愛想が付き、そんな自分をどうしても受けとめられなかったのです。ところが、この少女の涙と一言が彼に大きな転換をもたらしたのです。

それによって「そうなのだ、そういうことになつてしまったのは、この私なのだ」と、「初めて自分の中で何かが溶けた」と言っておられました。

これが、彼が自らを受け止めることの出発点になつたのです。

如来の呼びかけ

人間というものは根本的に、自分で自分を支えることが不可能なのです。

自分が人間であることを支え背負おうと思つたら、肩の骨が崩れるのです。人間よりも抱えている苦悩のほうが大きいのです。

ですから、親鸞聖人は、それが「煩惱具足の凡夫なのだ」とおっしゃいました。

「煩惱具足のわれらは」のわれらの『ら』のところ、人間ということが入るのです。われらの『ら』が身です、この身です。

「五濁悪世のわれら」、「煩惱具足のわれら」、「いしかわらつぶてのごとくなるわれら」、「ひさしくしずめるわれら」、この『ら』が人間を指しているのです。それが私だと。

これは如来によつて、そう呼び覚まされた人の言葉です。ちょうどその少女がネルソンさんを呼び覚ましたのと同じように。

本来、頷けるものではないですよ。「いしかわらつぶて」、何にも役にも立たないですよ、転がったようなものだという。そんなのが意義になりますか？ならないのですよ。

ところが、それを呼んでいる、受け止めて呼んでいるものがある。泣いてネルソンさんを受け止めているものがある。そのものが呼びかけてきた。

その呼び声に、泣いて受け止めてくれた人の眼差しを持って自分に頷くのです。「煩惱具足の凡夫」、これは如来の眼差しなのです。その如来が、我々を既にして受け止めて呼びかけている。

呼びかけと目覚め

人間という言葉も衆生という言葉も如来によつて見いだされている如来の側の言葉なの

です。

人間は人間自身を見出す事ができない。ところが、如来が人間を見出して、人間に呼びかけてくるのです。その呼び声に目覚めた人が、「煩惱具足のわれら」、こういう言葉を言うのです。

その時に「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなることあるべからざるを あわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり」、こういう言葉が生まれるのです。

どこまでいっても支えることの出来なかつたこの私というものを、その意義ではなくて私の存在そのものを呼んでくる、要するに、「煩惱具足のわれら」というものは、逆転して自らを見出してくるのでしよう？呼びかけられて、初めて自分自身を見いだすことが出来る。

これが「呼びかけと目覚め」・「廻向と廻心」、廻向の宗教なのです。

人間は人間に還ることによつてしか救われれない。迷いに還る、迷いを生きるより他にない。迷いを我として生きるよりほかない。矛盾を矛盾のまま我として生きるよりほかにないのです。

そのことを成り立たせてくださるのが、呼びかけですね、呼びかけと目覚めだ。